

PBL型リーダーシップ教育「環四国サイクリングプロジェクト」による 日台オンライン国際交流の実践と評価

仲道 雅輝¹⁾, 村田 晋也¹⁾, 浅田 隼平²⁾, 坂本 大蔵³⁾

- 1) 愛媛大学教育・学生支援機構教育企画室
- 2) 鹿児島大学総合教育機構キャリア形成支援センター
- 3) 愛媛県観光スポーツ文化振興局観光交流局サイクリング普及調整監

Implementation and Evaluation of PBL Program for Leadership Development: An Attempt of Japan-Taiwan Online Exchange by Shikoku Circuit Cycling Project

Masaki NAKAMICHI¹⁾, Shinya MURATA¹⁾, Shumpei ASADA²⁾, Daizo SAKAMOTO³⁾

- 1) Office for Educational Planning and Research, Institute for Education and Student Support, Ehime University
- 2) Career Development Center, Institute for Comprehensive Education, Kagoshima University
- 3) Ehime Prefecture Cycling Life-Style Promotion Division

1. はじめに

1.1. 背景

大学における質保証や産業界からの要請を主な背景として、近年、大学におけるリーダーシップ教育の重要性は増している。愛媛大学では、2007年から準正課教育としてリーダーシップ教育を行っている。準正課教育は、卒業要件に含まれる正課教育とは別に、単位付与は行わないが、大学の教育理念に基づいて教職員が関与する教育（愛媛大学 2020）であり、正課教育に比べて学生の主体性が特に重視される学習活動である。この準正課教育として開講されているリーダーシップ育成を目標とする共通教育発展科目に「愛媛大学リーダーズ・スクール（Ehime University Leaders School）」（以下、ELS）がある。ELSとは、愛媛大学が地域においてリーダーシップを発揮する人財の輩出を目的として実施している科目であり（村田ほか 2021）、2005年より開講している。

今回報告する「環四国サイクリングプロジェクト」は、ELSでの学習をより実践的なものするために共通教育発展科目として開講している「ファシリテーションとリーダーシップ（Ehime University Facilitation and Leadership）」（以下、EFL）に関連したプロジェクトである。EFLは、前学期・後学期と年2回の開講であったELSを前学期のみ

とし、ELSを受講した学生が、後学期により実践的なリーダーシップやファシリテーション力を修得するための科目として開講された。

EFLは、学生の企画・立案により地域社会や海外協定校と協働する産官学連携を基盤として、県や市町村の課題に取り組むPBL（Project Based Learning）型の授業である。

本稿では、この産官学連携によるPBL型リーダーシップ教育として実施した「環四国サイクリングプロジェクト」での取り組みを紹介する。本プロジェクトは、毎年四国4県を順に巡り、「自転車」という日本と台湾に共通の文化的コンテンツを媒体としたリーダーシップ教育であり、日台学生の国際交流活動でもある。歴史・文化等に触れるフィールドワークを通じた国際理解や、プロジェクトでの協働を通じたリーダーシップの育成、学生間の深いつながりの形成といった教育的目標だけでなく、愛媛県が推進する自転車新文化（サイクリングを核にして交流人口を拡大させ、地域の活性化につなげるとともに、県民に自転車を活用したライフスタイルを提案し、健康・生きがい・友情を育み、生活の質の向上を図ろうとする取り組み）（愛媛県自転車新文化推進課 2021）を、日台の学生が協力して広く社会に発信することも目的のひとつとしている。

本プロジェクトは2018年（愛媛県）に始まり、当年および2019年（高知県）のプログラムは、両国間を行き来

する対面形式で実施された。しかし、2020年は、新型コロナウイルス感染拡大の影響により、日台の交流はオンラインでの実施となった。オンライン開催という形態をとりながらも、リーダーシップ開発や国際交流の実現に向けて工夫した実践概要を紹介するとともに、得られた成果と今後の課題を考察する。

2. 方法

2.1. 参加者募集方法

プロジェクトへの参加は、学部や学年を問わず参加可能であるため全学生を対象として募集を行った。まず、募集要項を作成し、各学部のオンライン掲示板に掲載するとともに、関心のある学生に向けて説明会を開催した。2018年・2019年は対面で説明会を行ったが、2020年についてはオンラインで実施した。例年、対面での説明会には、キャンパスが離れている医学部からの参加はなかったが、オンライン説明会を行った2020年には、医学部からの参加者が数名あり、内1名は参加に至った。募集期間は3週間程度とし、参加申し込みは、対面とオンラインともにWebによる申し込みとした。

2.2. プロジェクト概要

2.2.1 2019年の実施概要（対面での実施）

対面で実施した2019年は、開催に先立ち、Facebookでの自己紹介や、高知県のサイクリングコースを簡単に紹介するブレ交流を行った。その後、大学間全学協定を締結している国立高雄科技大學（台湾）の学生が来日し、愛媛大学生とともにプロジェクトに参加した。

プロジェクトの運営にあたっては、愛媛大学生は、リーダーシップやチームビルディング、ファシリテーションに関する知識を基盤にし、どのように企画運営すれば、日台の学生が歴史や文化を理解し合い、自転車を通じて交流を深められるかをディスカッションした。企画検討の際には、

愛媛県の自転車新文化推進課から講師を招き、安全講習会や愛媛県における自転車文化の講義を受けた。さらに、プロジェクトに組み込む高知県内の史跡や観光資源、交流の活性化に有効なアクティビティ施設を調査し、方法やスケジュールを具体化した。準備段階における愛媛大学生のチーム内での活動は、原則として学生間で協議・決定し、随時教職員に相談する形で進めた。開催前に手続きが必要な愛媛県への後援申請やサイクリングコースにある施設の使用交渉等については、適時指導のもと学生が分担して行った。また、国立高雄科技大學の学生を受け入れるにあたり、愛媛大学生が、現地の下見や移動のシミュレーション、怪我等の緊急時の対応方法の検討と準備を行った。安全なサイクリングコース、体調不良者が出た場合に受診可能な病院、トイレの場所、給水ポイント等の情報を収集し、しおりとサイクリングMAPを作成した。

プログラムの日程は連続する4日間であり、サイクリング企画以外に、学生企画のセミナー（就職活動に関する日台の違い、方言講座、Instagramの写真の写し方の違いなど、歴史や文化の異同に関連した企画）を開催した。また、企画以外に自由な交流の時間をもち、参加者全体が思い思いに交流できるようプログラムを設定した（図1）。

プロジェクト終了後、愛媛大学生間でリフレクションを行い、事前の情報収集や企画立案、運営時の自らのリーダーシップやメンバー間の協力、プロジェクトの成果等について振り返りを行った。

2.2.2 2020年の実施概要（オンラインでの実施）

2020年は、渡航ができない感染状況であったため対面での交流は中止し、オンライン開催とした。そのため、これまで行ってきたような、予め愛媛大学生が準備したプログラムに、国立高雄科技大の学生が参加するかたちでの開催ではなく、企画・準備の段階から日台双方の学生が、複数回のオンラインミーティングにより1からプログラムを作り上げるかたちとした。これにより、対面よりも長い期



安全講習会後のスタート

サイクリング完走集合写真



サンプル動画

YouTube動画



カヌー体験

成果発表会

図1 対面開催の様子



集合写真

図2 オンライン開催の様子

表 1 2019年・2020年の環四国サイクリングプロジェクトのスケジュール比較

2019年 対面での開催		2020年 オンラインでの開催	
事前	<ul style="list-style-type: none"> ・募集要項等の作成・参加者募集，対面での説明会 ・愛媛県への後援申請など ・SNSでの自己紹介を実施 ・愛媛大学生は，現地地下見や宿泊，サイクリングMAP等の作成準備を行う 	事前	<ul style="list-style-type: none"> ・募集要項等の作成 ・参加者募集，オンライン説明会 ・愛媛県への後援申請など ・日台の合同学生チーム編成を作成 ・SNSでの自己紹介の実施
1日目	<ul style="list-style-type: none"> ・台湾学生の出迎え（港へ） ・日台合同チームでの顔合わせと自己紹介 ・自転車安全マナー講習①【愛媛県サイクリング普及調整監（坂本大蔵氏）による自転車安全講習】 ・サイクリングルートの検討・確認 ・各チームでリフレクション ・夕食準備，片付け，入浴・就寝 		<ul style="list-style-type: none"> ・日台学生それぞれにセミナー等の企画を検討 ・愛媛大学生による動画撮影のための注意点や安全講習を兼ねた動画教材の作成等準備 ・愛媛県サイクリング普及調整監による自転車安全講習の実施（愛媛大学生のみ） ・サイクリング動画撮影に向けた注意点やポイント，完成イメージ用の動画教材制作（西条市にて） ・動画教材の編集作業
2日目	<ul style="list-style-type: none"> ・朝食準備，片付け ・自転車安全マナー講習②学生による ・サイクリング（60キロメートル） ・昼食（地元レストラン等） ・リフレクション ・夕食準備，片付け，入浴・就寝 	1回目	<ul style="list-style-type: none"> ・オンラインでの顔合わせ，アイスブレイク ・セミナー（日本と台湾の共通点など） ・YouTube コンテスト企画の確認 ・日台合同チーム編成発表 ・サイクリング動画撮影での注意点ガイダンスを兼ねたサンプル動画の紹介 ・各チームでのYouTube動画制作の内容を検討開始
3日目	<ul style="list-style-type: none"> ・朝食準備，片付け ・カヌー体験 ・昼食（地元食堂での交流） ・セミナー（台湾と日本の共通点など） ・夕食（BBQ）準備，片付け ・キャンプファイヤー・点火イベント ・リフレクション ・成果発表に向けたチーム発表準備 ・入浴・就寝 	動画作成 2ヶ月	<ul style="list-style-type: none"> ・日台それぞれにサイクリング動画を撮影しチームで統合編集のため，複数回のオンラインミーティングを実施（各チーム10～15回程度：2ヶ月） ・日台それぞれでサイクリングを体験する ・地元での交流や歴史・文化の再発見・探索 ・撮影許可等の申請作業など
4日目	<ul style="list-style-type: none"> ・朝食準備，片付け ・学習成果発表会（チームごと） ・教職員スタッフ等による総評 ・次年度企画の紹介 ・振り返り・集合写真 ・松山（愛媛大学）へ帰路 ・台湾学生の見送り（チームで自由に交流） 	2回目	<ul style="list-style-type: none"> ・YouTube動画のコンテスト ・セミナー（日台の共通点・相違点など） ・LINEスタンプの作成 ・YouTubeコンテストの表彰 ・教職員スタッフ等による総評 ・振り返り・集合写真 ・次年度企画の紹介
事後	<ul style="list-style-type: none"> ・SNSでの交流 ・愛媛大学生での振り返り 	事後	<ul style="list-style-type: none"> ・SNSでの交流 ・愛媛大学生での振り返り

間をかけて同じ目標に向かって英語と日本語を使いながら対話し，交流する機会になると考えた。

また，オンライン開催では，学生企画セミナー（日台の朝食の違い，人気のある漫画，日本のアマビエについて，高雄百周年の紹介など）の他，日台学生がともに自転車で走ることができないという状況の中，サイクリングを通じた国際交流となるよう学生らが案を出し合い，日台の歴史や文化とサイクリングに関連した紹介動画を日台混合のチームで作成するプロジェクトとなった。チームは5名程度×10チームで構成した。

まず，愛媛大学の学生スタッフがサンプル動画を作成し，動画作成上の注意点（安全なサイクリングのルール，動画の撮影方法など）に関するガイダンスを兼ねてオンラインで共有した。なお，動画には両言語の字幕を付けた。

次に，学生がチーム編成を決定し，サイクリングにより

日台両国を紹介する動画を，各チーム独自のテーマを設定して作成した。テーマやシナリオの相談は学生間が随時オンラインで行い，日本と台湾でそれぞれが撮影した動画をWeb上で共有し，ひとつの作品に編集した。完成した作品は，単にオンラインで鑑賞し合うだけでなく，YouTubeに公開し，「YouTubeコンテスト」（図2）として相互評価によって出来栄を競う企画とし，評価の高かった動画を表彰した。作品の一例を紹介すると，サイクリングで消費したカロリー分だけ食べられるというルールで特産品を紹介するものや，松山と台湾の地元をサイクリングで散策ながら紹介するものなどがあつた。

リーダーシップ教育という観点からは，動画の作成過程において，それぞれの国での実施ではあるが，テーマに沿った現地取材や撮影が必要であるため，対面での実施と同様に，関係各所との交渉，許可申請などのタスクをクリアす

る必要があった。これらのチーム活動を通じて、メンバーとの協力やリーダーシップの発揮、ファシリテーションスキルの実践が可能であった。以上のプログラムにより、初の試みであったオンライン版環四国サイクリングプロジェクトが終了した(表1)。

2.3. 参加者アンケート

2019年、2020年ともにプロジェクトに参加した日台学生を対象に、プロジェクトに参加しての満足度と充実感、プロジェクト終了後の参加者間での交流の継続の有無と今後の交流予定、プロジェクトへの参加により、自国または相手の国の歴史や文化に対する理解が深まったかどうか、プロジェクトの参加前後で、自身の考えや行動に変化があったか、次回のプロジェクトに参加したいか、友人にプロジェクトへの参加を進めたいかについてGoogle formsを用いてアンケート調査を行った。国立高雄科技大学の学生向けには翻訳したフォームを使用した。

3. 結果

3.1. 参加者等

2019年度は対面で実施し、2020年度は新型コロナウイルス感染拡大の影響によりオンラインでの開催となったが、参加者の構成や人数に大きな違いはなく、50名前後の学生が参加し(表2)、約5割が初参加者であった。

表2 参加者数

2019年度(対面)		2020年度(オンライン)	
愛媛大学	32名	愛媛大学	27名
国立高雄科技大学	17名	国立高雄科技大学	23名
計	49名	計	50名

3.2. 参加者アンケート結果

2019年の回答数24(回収率:49.0%)、2020年の回答数27(回収率:54.0%)であった。

3.2.1. 満足度

プロジェクトに参加しての満足度への回答は、2019年は「満足」「まあまあ満足」との回答が合わせて95.8%、

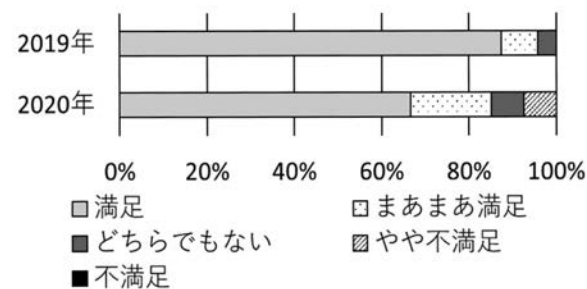


図3 満足度の回答結果

2020年は85.2%であった。両年ともに「不満足」との回答はなかったが、2020年には「やや不満足」が7.4%あった(図3)。

3.2.2. 充実感

プロジェクトに参加しての充実感への回答は、「とても充実感があった」との回答は、2019年は87.5%、2020年は18.5%であった。「とても充実感があった」「まあまあ充実感があった」を合わせた回答は、2019年は100%、2020年は81.5%であった。「あまり充実感がなかった」は、2019年には0%であったが、2020年には11.1%であった。「充実感がなかった」は両年とも0%であった(図4)。

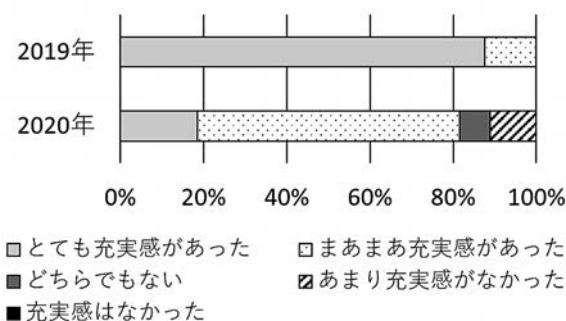


図4 充実度の回答結果

3.2.3. 交流の継続

プロジェクト後の交流の継続への回答は、「プロジェクト後、継続してやりとりがある」が、2019年は70.8%、2020年は29.6%であった。「今はしていないが、プロジェクト後にしたことがある」については、2019年は12.5%、2020年は29.6%であった。「今はしていないが、これからするつもりだ」は、2019年は33.3%、2020年は8.3%であった。「今もしていないしこれからするつもりはない」については、2019年は8.3%、2020年は7.4%であった(図5)。

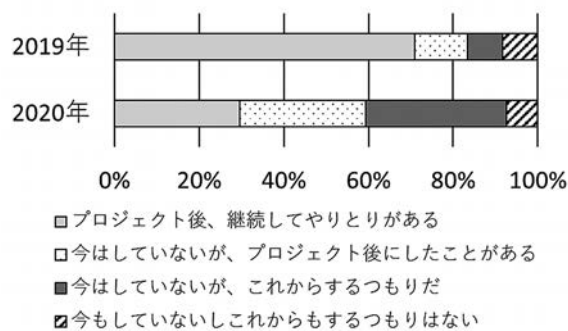


図5 交流の継続の回答

3.2.4. 文化や歴史の相互理解

プロジェクトを通じた自国や相手国の文化や歴史への理解に関する回答では、「深まった」が、2019年は75.0%、2020年は7.5%、「まあまあ深まった」が、2019年は16.7%、2020年は33.3%であった。「どちらでもない」が、

2019年は8.3%，2020年は29.6%であった。「あまり深まらなかった」が、2019年は0%であったが、2020年には29.6%であった。両年とも、「深まらなかった」は0%であった（図6）。

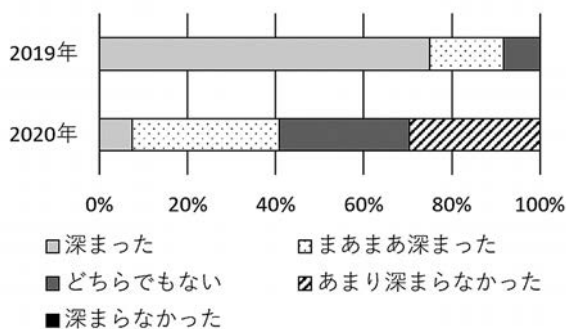


図6 文化や歴史の相互理解への回答

また、どのようなことについて理解が深まったかを記述する回答では、2019年には「日本は一つのところでずっと働くが台湾はそうではない」「日本人の慎重さに驚いた」「台湾の学生は楽しむのが上手。自分の意見をしっかりと伝えてくれた」「日本と台湾の人たちはシャイな人が多い」という共通点を、他の国よりも感じた」など、具体的な異同について記載していたが、2020年は「あまり歴史や文化について話せない」「文化の異同について議論できた」「台湾の国民性」など、深まった内容に関する記述が少なく、具体的なものは「お寺参りの方法が似ているようで少し違った」のみであった。

3.2.5. プロジェクト前後の自身の変化

プロジェクト前後に変化があったかとの問いへの回答については、2019年に多かった回答は、「日本や台湾に対して興味を持つようになった」「もっと国際交流をしたいと思うようになった」であった。2020年は、「他言語の勉強をしようと思うようになった」「仲間を大切にしようと思った」であった（表3）。

表3 プロジェクト前後の自身の変化

	2019年	2020年
日本や台湾に対して興味を持つようになった	75.0 (1)	37.0 (5)
もっと国際交流をしたいと思うようになった	75.0 (1)	40.7 (4)
他言語の勉強をしようと思うようになった	58.3 (3)	51.9 (1)
もっとリーダーシップを身につけたいと思うようになった	33.3 (5)	37.0 (5)
仲間を大切にしようと思った	54.2 (4)	51.9 (1)
サイクリングに興味を持つようになった	33.3 (5)	44.4 (3)

% (順位)

3.2.6. 次回プロジェクトへの参加意思

次回（次年度）開催の本プロジェクトに参加したいかとの質問への回答については、「参加したい」が、2019年は83.3%，2020年は55.6%であった。「まあまあ参加したい」が、2019年は12.5%，2020年は25.9%であった。「どちらでもない」が、2019年は4.2%，2020年は11.1%であった。「あまり参加したくない」が、2019年は0%であったが、2020年は7.4%であった。両年とも「参加したくない」は0%であった（図7）。

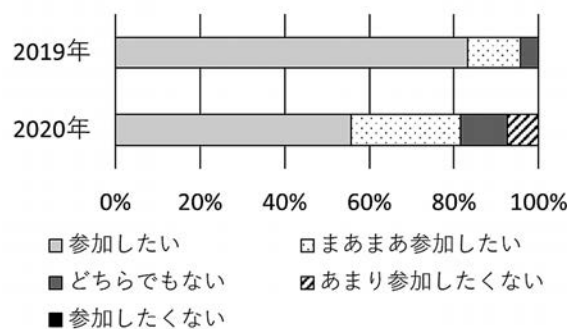


図7 次回プロジェクトへの参加意思の結果

3.2.7. 友人にプロジェクトへの参加を勧めたいか

友人に、プロジェクトへの参加を勧めたいかとの質問への回答は、「勧めたい」が、2019年が83.3%，2020年は40.7%であった。「どちらかという勧めたい」が、2019年は16.7%，2020年は40.7%であった。「どちらでもない」が、2019年は0%，2020年は14.8%であった。「どちらかという勧めたくない」は、両年とも0%であったが、「勧めたくない」は2020年で3.8%であった（図8）。

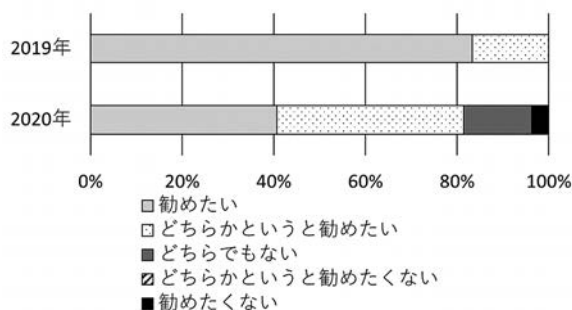


図8 友人に参加を勧めたいかへの回答結果

4. 考察

4.1. 参加者

これまで対面で実施していた環四国サイクリングプロジェクトでは、愛媛大学生の参加者は、松山市内のキャンパスにある学部の学生であったが、2020年にオンラインで実施したことにより、約15キロメートル離れた東温市のキャンパスにある医学部の学生が参加している。これは、学生にとって移動の必要がなくなったことで参加しや

すくなったことが要因と考えられる。募集要項や説明会でも、オンライン開催となる可能性について知らせていたため、当初は参加の敷居が低くなり例年より大幅に増える可能性、もしくは、深い交流を求める学生にとっては物足りなく感じ参加者が大幅に減少する可能性の両方を予測していたが、例年と変わらない参加者数となった。

この結果から、リーダーシップ開発や国際交流に関心のある学生は、実施方法に関わらず目的をもって積極的に参加する傾向にあることが分かった。今後、対面やオンライン、もしくはハイブリッド等、状況に合わせて開催方法を柔軟に検討できることを示す結果であった。

4.2. 参加者アンケートの結果から

満足度については、高知県をフィールドとして対面で実施した2019年には、「満足」との回答が80%台であったのに対し、オンラインで実施した2020年は、60%台であった。このことは、オンラインでは、感染防止による行動制限のために宿泊での交流ができず、参加者同士が協力する課題や、アクティビティに取り組む活動を少なくせざるを得なかったことから、国際交流に関心がある学生にとっては、物足りない結果となったことが影響している可能性がある。しかしながら、「満足」と「まあまあ満足」を足した回答は90%を超えており、対面での実施と遜色ない結果であったといえる。これは、コロナ禍により中止となる可能性がある中、さまざまに工夫をしてオンライン実施にこぎつけたという過程を共有できていたため、全体的な満足度が維持されたと推察できる。

一般的に、同じ交流プログラムで対面とオンラインを比較した場合、恐らく対面の方が満足度は高くなると推測できる。なぜなら、Web会議システムなどのメディアを介したコミュニケーションと、直接会ってのコミュニケーションとでは、瞬時に伝わる情報の量や質、ともにいるという存在感の違いがあり、会うためにかけている時間や労力も異なるため、相互理解を目的とする交流への満足感に差が生じやすいと考えるためである。

このような、対面することの優位性について論じた先行研究があり、コミュニケーションメディアを通じて感じる存在感をテレプレゼンスと名付け、コミュニケーションメディアが人間関係に及ぼす影響について検討されている(呉羽 2020)。そこでは、テレプレゼンスとは、欧米の雑誌に記述されたミンスキー(Minsky 1980)による造語として紹介されており、何らかの装置の操作を通じて、自身が体とは別の離れた場所にいると感じる感覚であり、コミュニケーション相手がいる場合には、自身や相手が抱く「一緒にいる」という感覚とされている(呉羽 2020; Dreyfus 2001)。

さらに呉羽は、対面の優位性は非効率性にあると述べている。つまり、非効率な方法を選択することで「この対

面を大切にしている」というメタメッセージが相手に伝わるとしている。この点を踏まえると、効率的なメディアを選択することで対面とは逆のメタメッセージが伝わる可能性があるといえる。また、今回のように、オンラインによる国際交流を行った場合、メディアを用いて手軽につながれるがために、双方の交流への熱意が対面に比して相対的に弱くなる可能性をはらんでいるともいえる。しかしながら、今回のアンケート結果をみると、オンライン開催での著しい満足度の低下はなかった。その要因として、日台共同で達成する課題を複数設定し、事前準備を周到に行わなければならないプログラムにしたことで、決して手軽ではなく、労力をかけてプロジェクトに参加したという感覚を持つことができ、満足感につながったのではないかと推察する。

充実感については、「とても充実感があった」が、オンラインでは10%台であり、80%以上であった対面との差が顕著であった。満足感と充実感の違いを考えた場合、満足感とは想定していた結果と実際の結果に乖離がなく納得できた感覚であり、充実感とは自分が十分に力を出し関与できたというやり切った感覚という違いがあるといえる。2019年の対面によるプロジェクトに参加した学生の充実感が高かった要因として、学生は自ら希望して参加していること、宿泊を伴う4日間の日程で生活行動をともにし、仲間とともに60キロメートルをサイクリングで走破した他、キャンプファイヤーやカヌー体験、地元の食堂経営者との交流など、協力していくつもの課題を解決していく充実した活動となっていたことが要因と考えられる。つまり、これらの活動が、プロジェクトへの肯定的感情と、課題達成に向けた集中的なプログラムへの没入感によって得られたフロー体験(Csikszentmihalyi 1975; 石村 2008; 今村 2019; 大森 2020)であったと推察できる。

一方で、2020年には、日台合同での動画作成に2ヶ月の期間を設け、オンライン上で反復して交流できるようにし、密度の低さを時間の長さで補完する工夫をした。この工夫は、設定された課題を協力して達成するための十分な時間をかけることができ、満足感の向上に寄与した一方で、動画作成期間中は、それぞれに日常の授業や生活を送りつつ取り組むことになるため、本プロジェクトのみに集中して取り組んだわけではない。つまり、高い充実感をもたらす「フロー体験」の要素である没入感については、新型コロナによる渡航自粛と感染予防策の徹底という不可避の条件のために、没入感を生み出しにくい環境とならざるを得なかったとはいえ、そのことが充実感に影響したと推察される。

これら2つの結果から、国際交流を題材としたPBLにおいては、実施方法の検討段階から学生が関与することでプログラムへの納得感を高め、共同して取り組む課題には明確な達成要件や期日を設けるとともに、プログラムの時

間配分では、日台の参加学生がある程度集中的に取り組まなければならない状況を作ることが重要といえる。

プロジェクト終了後の学生間での交流の継続については、オンライン開催であった2020年の方が低く、交流による学生間の結びつきがそれほど強くないままに終わってしまったと推察される。この点については、共同して取り組む活動を通じて自身の役割を果たし、グループメンバーとの一体感を感じることで、関係性が深まり、その後交流の継続につながると考えられる。よって、オンラインでもそのような関係性の深まりにつながる。例えば、達成が容易ではなく、メンバーの協力が努力が必要となるレベルの課題を課すなどの仕掛けを準備しておく必要がある。

自国または相手の国の歴史や文化の相互理解については、2019年には深まったとの回答が70%を超えていたのに対して、2020年は10%台と大幅に低下していた。これは、その国に足を運び五感で感じ、相手との対面でのやり取りから得られる情報が膨大であることや、学生によって関心のある事柄が違うために、オンラインで中心となる紹介動画や配布資料などのある程度整えられた情報の提供では、個々の理解が深まりにくい可能性がある。そのため、学生自身が自らの興味関心に従い主体的に情報を収集し、交流できる機会があることが必要と考えられる。また、画面を通じて得られる情報は、テレビや映画等の情報と似て一方的な印象を与えやすく、体験を通じた理解ほどの深まりは得られにくい可能性がある。自由記述の内容においても、対面実施の回答には、理解した内容が比較的具体的に述べられているのに対し、オンラインの回答ではほとんどないという結果となっていた。その要因の一つはこのような交流方法の制限によるものではないかと考える。

プロジェクトへの参加前後の自身の変化については、対面での実施では、相手の国に対する関心が高まったことを示す回答が多かったが、オンラインでは他言語の学習に対する関心が高まっていた。オンラインにおいて他言語への関心が高まった要因として、画面上つまり表情や言葉でのやり取りが中心であり、身振りや姿勢などの非言語的なメッセージがうまく捉えられず、言語力の必要性を感じやすいのではないかと推察する。また、Webを介するがゆえに生じる通信上の微妙な「間」などによっても会話に不安を感じやすく、率直な意見交換のハードルが高くなり、自身の変化につながるような深いやり取りが生まれにくかった可能性がある。

次のプロジェクトへの参加意思については、「参加したい」と「まあまあ参加したい」を足した回答が、2019年は90%を超え、2020年についても80%を超えており、満足感と同様、充実感や相互理解への回答結果ほどの差異はみられなかった。その要因として、コロナ禍での開催であり、プロジェクトで実現できることに限界があることを

了解していると同時に、感染が終息し対面が再開する可能性への期待が含まれていると考えられる。

友人にプロジェクトへの参加を勧めたいかについては、2019年には80%以上が「勧めたい」と回答していたのに対して、2020年は40%程度にとどまった。その要因として、参加したことによって得られた充実感や相互理解の実感が相対的に弱かったこと、次回以降のコロナ禍がおさまらず、オンラインとなる可能性もゼロではないことを考えると明確に「勧めたい」とは回答できなかった可能性がある。

4.3. 今後の開催に向けた課題

今回、2019年に対面、2020年にオンラインでPBL型リーダーシップ教育「環四国サイクリングプロジェクト」を実施し、その概要を紹介した。当初、プロジェクトの中止も視野に入れて検討していたが、本稿で紹介したような始めて間もない国際交流の場合、たとえ方法を変化させたとしても、継続する姿勢を保つことによって双方の信頼関係が構築されていくという側面があり、コロナ禍でも形を変えて開催する方法を模索した。また、参加を希望している学生からも、オンラインでも開催して欲しいとの意見もあり、大学側の理解と協力のもと、制限のある中ではあるが開催することができた。特に、PBL型リーダーシップ教育では、さまざまな課題解決やプロジェクトの実施を通じたリーダーシップの育成が目的とされていることに鑑みると、対面不可能という状況で国際交流を成立させる、あるいは愛媛大学生同士の対面での活動においてどのように感染予防行動を徹底させるかなどについて考え実行すること自体が、貴重なプロジェクトであると考えた。また、当初の予想に反して例年通りの参加者が集まり、プロジェクトを完了できたことは、学生たちの中に、リーダーシップ教育への関心や要望が高くかつ継続して存在することを示していると考えられ、コロナ禍後もより充実した活動となるよう洗練させていく必要がある。

2020年には、図らずもオンラインでの実施となったことで、逆説的に対面のメリットが明らかになったとともに、参加者数や満足感、次回プロジェクトへの参加意思はオンラインでも大きく減少しなかったことから、対面で得られる効果を最大化しつつ、オンラインのもつ敷居の低さや利便性を活用した「ハイブリッド型PBL」によるリーダーシップ教育の実現可能性が示唆された。今後、さらに高い満足感や充実感、プロジェクト前後の自身の変化が感じられる開催方法について、学生とともに創意工夫し、ハイブリッド型PBLによるリーダーシップ教育の実践方法を開発していきたい。

参考文献

- Dreyfus, H. L. (石原孝二訳) (2001) *On the Internet*. London: Routledge. インターネットについて－哲学的考察, 産業図書.
- 愛媛大学 (2020) 準正課教育, https://www.ehime-u.ac.jp/campus_life/ex-study/ (閲覧日: 2021年9月1日)
- 愛媛県自転車新文化推進課 (2021) 愛媛県自転車新文化推進計画 <https://www.pref.ehime.jp/h14600/jitenshashinbunka/suishin/keikaku.html> (閲覧日: 2021年9月1日)
- 石村郁夫 (2008) フロー体験に関する研究の動向と今後の課題, 筑波大学心理学研究, 36, 85-96.
- 今村浩明 (訳) M. チクセントミハイ (著) (2019) フロー体験喜びの現象学, 世界思想社.
- 呉羽真 (2020) テレプレゼンス技術は人間関係を貧困にするか? - コミュニケーションメディアの技術哲学 -, *Contemporary and Applied Philosophy*, 11, 58-76.
- Minsky, M., (1980) *Telepresence*. *Omnibot*, 6, 45-52.
- 村田晋也, 仲道雅輝, 浅田隼平 (2021) 準正課教育プログラムにおける遠隔授業実践の試み, *大学教育実践ジャーナル*, 19, 157-164.
- 大森弘 (監訳) M. チクセントミハイ (著) (2020) フロー体験入門 楽しみと創造の心理学, 世界思想社.